

## ● 新指定答申文化財の概要

【種 別】有形文化財 絵画

【名 称】紙本墨画淡彩林和靖図屏風 しほんぼくがたんさいりんなせいずびょうぶ 曾我 蕭 白 筆 そ が しょうはくひつ

【員 数】六曲一双 ろっきょくいっそう

【所在地】津市大谷町 11 三重県立美術館

【年 代】江戸時代 宝暦 10 年（1760）

【大きさ】各 172.0×365.0 cm

【概 要】

江戸時代中期の絵師、曾我蕭白（そがしょうはく）（1730～81）筆の六曲一双（ろっきょくいっそう）の屏風です。中国北宋の文人 林和靖（りんなせい）と二人の童子、梅の大樹と三日月の下で遊ぶ鶴の番（つがい）という江戸時代にはよく描かれた画題を、繊細な表現と大胆な画面構成で描いています。先行する表現を参考にしながらも、それをあえて壊して斬新な作品に仕上げるという蕭白画の特徴をよく表しています。

蕭白は、生涯に2度三重県内を遊歴したことがわかっており、県内には数多くの作品が残っていますが、この作品は「宝暦辰春」の落款（らっかん）から、1度目の遊歴に近い宝暦10年春に描かれた作品で、現在確認されている蕭白作品の最も古い「久米仙人図屏風」（ボストン美術館所蔵）に次ぐ国内最古級の作品です。



## ● 新指定答申文化財の概要

【種 別】有形文化財 彫刻

【名 称】木造阿弥陀如来立像  
もくぞう あみだ によらいりゅうぞう

【員 数】1 躯

【所在地】熊野市に ぎ しまちょう二木島町 1062 最明寺 さいみょうじ

【年 代】平安時代後期（12 世紀）

【大きさ】像高 95.3cm

【概 要】

木造阿弥陀如来立像（もくぞうあみだによらいりゅうぞう）は、最明寺（さいみょうじ、曹洞宗）の本尊です。元禄元（1688）年以前に再建された本堂（三重県指定文化財）の厨子（ずし）に安置されています。

円満で穏やかな表情や、浅く整えられた衣の表現は、平安時代後期の典型的な作風を示しています。一方で、穏やかな表情のなかにもやや引き締まった表現がみられることから、鎌倉時代に近づいた 12 世紀後半から末頃の制作と考えられます。

熊野市以南で最も古い仏像であり、当地域の彫刻史を把握する上で重要な文化財といえます。



## ● 新指定答申文化財の概要

【種 別】有形文化財 彫刻

【名 称】木造蔵王権現立像<sup>もくぞうざおうごんげんりゅうぞう</sup>

【員 数】3 躯

【所在地】津市美杉町三多気<sup>みたき</sup>204 真福院<sup>しんぷくいん</sup>

【年 代】江戸時代前期（17 世紀）

【大きさ】中央像 像高 185cm、左像 像高 183cm、右像 像高 182cm

【概 要】

木造蔵王権現立像（もくぞうざおうごんげんりゅうぞう）3 躯は、津市美杉町三多気（みたき）にある真福院（しんぷくいん、真言宗醍醐派）の本尊です。本像は 3 躯とも等身大・大型で、像容と構造形式は共通しています。江戸時代前期に、大峯修験（おおみねしゅげん）の総本山である金峯山寺蔵王堂（きんぷせんじざおうどう）（奈良県吉野町）の三尊像（さんそんぞう）形式を踏襲して作ったと考えられます。現在の彩色は寛政 4（1792）年に補われたものです。金峯山寺と同じ三尊像形式の像例は全国的に見ても少なく、大峯修験の地域伝播のあり方を明確に示す貴重な作例であるとともに、本県における修験道や蔵王権現信仰を知るうえで最も代表的な彫刻です。



写真 1 全体（真福院内陣内）



写真 2 右像



## ● 新指定答申文化財の概要

【種 別】有形文化財 歴史資料

【名 称】伊州御城下破屋損所絵図 <sup>いしゅうごじょうかはおくそんしよえず</sup> 附 <sup>つけたり</sup> 袋、書状

【員 数】2 <sup>ほ</sup>舗、附2点

【所在地】伊賀市上野向島町

【年 代】江戸時代 嘉永7（1854）年

【大きさ】絵図（城郭）：縦 53.5 cm、横 71.4 cm

絵図（城下町）：縦 132.0 cm、横 192.4 cm

袋：縦 31.8 cm、横 18.2 cm 書状：縦 16.5 cm、横 53.4 cm

### 【概 要】

伊州御城下破屋損所絵図は、嘉永7（1854）年6月15日に、伊賀地域北部を震源とする地震（「安政伊賀上野地震」）により被害を受けた上野城と上野城下町の被災状況を描いたものです。本絵図は、石垣の損傷、地割れや斜面崩壊、建物損壊（武家屋敷、町屋）の色分けと説明書きにより被害状況を詳細に記録しています。また、絵図に伴う袋と書状には、絵図を作成した絵師と地震の対応に従事した藤堂藩の役人との一連のやり取りが記載されており、絵図作成にかかる経緯がわかります。

江戸時代の藤堂藩における地震災害への対応を理解するうえで、欠くことのできない重要な文化財といえます。



写真1

絵図（城郭）、絵図（城下町）、  
袋、書状

城郭の絵図と城下町の絵図を  
重ねた状況

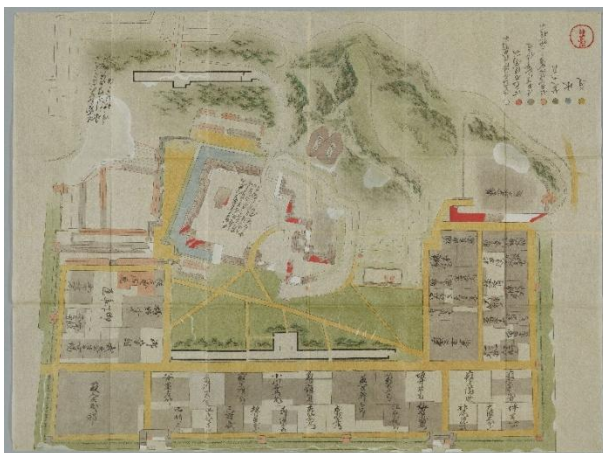


写真2 絵図（城郭）

上野城周辺の被害状況を色別で示す

白色 石垣や地形が崩れた所

赤色 石垣が変形した所

灰色 建物の倒壊

橙色 被害あるが復旧を  
要さない所

## ● 新指定答申文化財の概要

【種 別】有形民俗文化財

【名 称】<sup>とうじんおどり</sup>唐人踊 <sup>おおのぼり</sup>大 幟

【員 数】1 <sup>りゅう</sup>流

【所在地】津市東丸之内 19-4

【年 代】江戸時代後期（19 世紀初頭）

【大きさ】長さ 345 cm、幅 126 cm

【概 要】

唐人踊大幟（とうじんおどりおおのぼり）は、津八幡宮（津市藤方）の祭礼に伴い、津市の分部町（わけべちょう）が出し物として披露する唐人踊で明治時代末頃まで実際に使われていたものです。戦災により、唐人踊で使用された他の衣装や楽器等は焼失しているため、江戸時代から残るものは大幟のみです。

大幟の中央には、両面に絹絵の降龍図（こうりゅうず）が縫い付けられています。四方には、金糸による龍や鳳凰など、絢爛な装飾を施した額縁（がくぶち）が刺繍され、さらに外側 3 方には鋸歯（きょし）状の鱗（ひれ）が装飾されています。側面には、付け根に絹糸による多様な護符文が表現された竿受けが取り付けられています。

製作年代は、江戸時代後期、19 世紀初頭頃と考えられます。ただし、降龍図は江戸時代前期の古い特徴を持ち、大幟が製作される際に、別のものから移された可能性があります。各所に補修がみられ、江戸時代後期から明治時代末頃までの約 100 年間、世代を越えて地域の伝統芸能の用具として使用された歴史的変遷がうかがえます。

